

大会テーマ研究会/全体会

11月12日（木）13:00～17:00

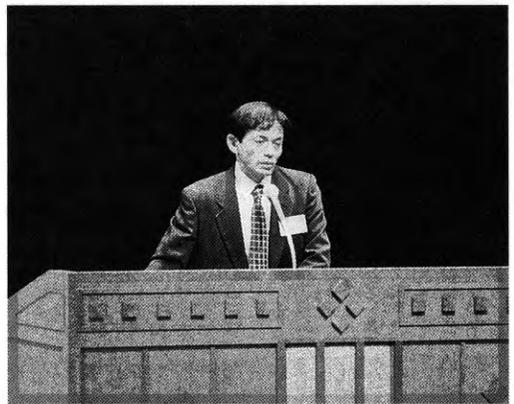
沖縄県地域史協議会20年の歩みと地域史の活動 「地域史づくり」－沖縄県今帰仁村の事例－

今帰仁村歴史文化センター（沖縄県地域史協議会代表） 仲原 弘哲

ここで報告する今帰仁村における「地域史づくり」は、主に今帰仁村歴史文化センターが行っている調査研究と、その目的や方法などについてのものである。今帰仁村歴史文化センターは、三階建ての建物で平成7年5月オープンした。床面積が約2,100平方メートルあり、展示室を三つと講堂・研修室・作業室・収蔵庫・事務室・談話室などを持つ。

今帰仁村は、沖縄本島の北部（山原）の本部半島の北東部に位置し、人口が約9,600人の小さな村（ソン）である。1666年までは、現在の本部町を含む大きな間切（現在の村）であったが、その年今帰仁間切が今帰仁と本部の二つの間切に分割され、ほぼ現在規模の今帰仁村の面積になった。沖縄本島が三山鼎立していた時代（12～15世紀初頭）、今帰仁城（ナキジングスク、別名北山城ともいう）は山原の政治や文化の拠点であった。また、源為朝公の渡来伝説やオモロで「うむてん」と謡われた運天港のある村（ソン）でもある。一万人足らずの小さな今帰仁村であるが、かつて今帰仁グスクを拠点にして山原、そして奄美に及ぶ北山文化圏を形成していた時代がある。

今帰仁村歴史文化センターは「地域史づくり」を通して、再び歴史・文化の拠点にしていくことを考えている。これまで今帰仁村歴史文化センターでは今帰仁の19のムラ・シマの歴史、小字、地名、生活道具、屋号、ノロ関係、祭祀など様々な調査を行ってきた。その他に写真に記



録された今帰仁をシリーズで読み込み、調査してきた。そして調査したものを形にして地域に返してきたが、そのような調査研究の成果を『なきじん研究』や「すくみち」、さらに常設展や企画展に反映させてきた。本稿では「地域史づくり」に関わる基本的な考え方やこれまでの成果の一端を紹介したい。

1. 今帰仁村における「地域づくり」

今帰仁村における「地域史づくり」とは、今帰仁村を中心とした地域史を編集していく作業と歴史文化センター（博物館に相当する施設）の活動を含めている。今帰仁村における地域史づくり、つまり今帰仁村における調査・研究は歴史文化センターの常設展や企画展、日常の活動を規定していく作業でもある。言い換えると、これまで行ってきた調査・研究の成果が歴史文化センターの展示や「地域史づくり」につなが

っていくわけである。現在調査・研究（地域史づくり）と博物館活動という二つの大きな業務を並行しながら進めている。今帰仁村歴史文化センターがどのような調査・研究をし「地域史づくり」を進めているのか、機関誌の「すくみち」から主なものを具体的に拾ってみた。

- ・各字（ムラ・シマ）ごとの小字調査・記録
- ・ハサギ（アサギ）の調査
- ・芭蕉布調査
- ・勢理客のノロ関係資料の調査・研究
- ・天底のサーザーウエー調査・報告
- ・古宇利の海神祭（ウンジャミ）調査・報告
- ・今帰仁のムラ・シマの研究・報告
- ・今帰仁の藍と芭蕉の研究・報告
- ・明治時代の「辞令書」の調査・報告
- ・今帰仁の主な墓の分布
- ・平敷村の明治期の図面の研究・報告
- ・資料の紹介（祭祀関係資料）
- ・今帰仁のムラや集落の移動の研究・報告
- ・主な墓の分布調査・報告
- ・今帰仁の歴史と文化
- ・諸志の宮城家（ヌルドウンチ）の墓調査・報告
- ・今泊の海神祭（ウンジャミ）の調査・報告
- ・今帰仁の間切役人の役職と屋号の研究・報告
- ・北山監守（今帰仁按司）と今帰仁の歴史
- ・山北王の時代
- ・古宇利島のサージャーウエー調査・報告
- ・字（ムラ・シマ）ごとの屋号調査・報告
- ・ムラ・シマの歴史
- ・今帰仁の自然
- ・今帰仁の生活道具の調査・報告
- ・今帰仁の海岸地名の調査・報告
- ・平敷のタキヌウガンの調査・報告
- ・今帰仁の稲作
- ・宿道（スクミチ）の調査・報告
- ・今帰仁村の小地名の調査
- ・古宇利島のタキヌ御願調査・報告
- ・塩田跡調査・報告
- ・今帰仁村の稲作調査
- ・今泊の灌漑用水路
- ・湧川のウフユミ・ワラビミチ

- ・古琉球の山原
- ・湧川の歴史
- ・湧川の海岸地名
- ・今泊の「すくみち」
- ・今泊の干潮（ピシ）
- ・古宇利の御嶽の調査・報告
- ・宮古城辺町保良ガー聞き取り調査
- ・諸志の歴史
- ・「すく道」諸志
- ・ターラグスクとチンマーサー
- ・生活環境の移り変わり
- ・仲尾次の豊年祭—調査・記録—
- ・資料紹介『戦後、復興期の議事録』
- ・古宇利の歴史
- ・平敷の神アサギとその周辺
- ・今帰仁の生活道具
- ・ホセ・ホアキンの世界

それらの調査報告や記録が、将来手掛けようしている「今帰仁村の地域史」（『今帰仁村史』編集の基本資料として活用されるものである。その他に、企画展を開催したり、「すくみち」や『なきじん研究』、今帰仁関係資料などの発行がある。

[準備段階の企画展]

- ・第1回企画展—今帰仁のムラ・シマ—
- ・第2回企画展—今帰仁の歴史と文化—
- ・第3回企画展—今帰仁の自然—
- ・第4回企画展—今帰仁の生活道具—

[開館後の企画展]

- ・第1回企画展—今帰仁の戦前・戦後資料展—辞令書・公文書・写真など—
- ・第2回企画展—写真に見る今帰仁—ムラ・シマの風景・人々・生活—
- ・第3回企画展—今帰仁の地名—地名は先人達からのメッセージ—
- ・第4回企画展—古宇利島—人々・神人の祈り—
- ・第5回企画展—第4期子供たち、ムラ・シマを描く—
- ・第6回企画展—運天港—歴史を語る—
- ・第7回企画展—シマンチュの装い—芭蕉布・晴れ着・ムラ踊り—

- ・第8回企画展－山原のグスク－今帰仁城跡発掘遺物を中心に－（前期）
- ・第9回企画展－山原のグスク－今帰仁城跡発掘遺物を中心に－（後期）
- ・第10回企画展－第5期ムラ・シマ講座－ムラ・シマを描く－
- ・第11回企画展－おとば学園の仲間たち－生活の中から－
- ・第12回企画展－山原の神アサギ－神と村人との接点－
- ・第13回企画展－新城徳祐氏寄贈資料展－グスク・芸能・民俗・ノート類－
- ・第14回企画展－第6期ムラ・シマ講座－ムラ・シマを描く－

〔開館後の特別展〕

- ・第1回特別展－ホセ・ホアキン作陶展－ホアキンの世界
- ・第2回特別展－ワラビ細工－魅せられる作品・色・人－
- ・第3回特別展－嶋原徳七作陶展－土を焼く－
- ・第4回特別展－かな文字の世界－かな・画・墨の重なり－
- ・「すくみち」の発行（第一号～第三十号）
- ・『なきじん研究1』－今帰仁のムラ・シマ－
- ・『なきじん研究2』－すくみち－
- ・『なきじん研究3』－今帰仁の歴史－
- ・『なきじん研究4』－すくみち－
- ・『なきじん研究5』－今帰仁の歴史と文化（展示案内）－
- ・『なきじん研究6』－今帰仁のムラ・シマ－
- ・『なきじん研究7』－今帰仁の地名－小字－
- ・『なきじん研究8』－すくみち－

それらの調査研究や報告や記録づくりは、将来『今帰仁村史』の編さんに組み込まれていくであろうし、そのことを想定しての作業である。

2. 教育・普及活動－ムラ・シマ講座－

歴史文化センターでは、教育・普及活動の一

環として小学生を対象とした「今帰仁のムラ・シマ講座」を開設している。このムラ・シマ講座は、今帰仁のムラ・シマの御嶽の湧泉や神アサギなど、一つひとつを小学生の視点で見、そして記録していく作業である。講座の中で具体的にムラ・シマを記録していきながら、そこから今帰仁のムラ・シマの歴史や文化を体で感じ読みとっていく。そして、歴史や文化を担っているのはムラ・シマに住んでいる一人ひとりであることを実感させる。そのことをねらいとして進めている。小学生の視点で調査・記録されたものは『今帰仁のムラ・シマ講座』として毎年冊子にまとめられる。

平成10年度は、次のムラ・シマをまわりグスク・神アサギ・御嶽・ガマ（洞窟）・番所（役場）跡・石橋・井戸・墓などを記録した。

- ① 今帰仁グスク（5地点）
今帰仁グスク正門・旧道と階段の道・グスク内のイベ・志慶真郭
 - ② 仲尾次（5地点）
神ハサギ・石橋・イリンハー・石切り場・イジヌイヤーヤ（洞窟）
 - ③ 謝名（4地点）
御願所・神アサギ・シカー（湧泉）・トヌカ（洞窟）
 - ④ 大宜味村津波（4地点）
原石・ニガミガー・ヌルガー・神アサギ
 - ⑤ 天底（4地点）
神アサギ・ヌルドンチ・御嶽・アミスガー
 - ⑥ 運天（6地点）
テラガマ（洞窟）・百按司墓・大北墓・神アサギ・番所（役場）跡・井戸
- 現場での説明は職員が行い、実測したり聞き取りをした一人ひとりの記録は450頁に及ぶ『今帰仁のムラ・シマ』－小学生の調査・記録ノート－としてまとめた。

3. 写真を歴史史料として

これまで今帰仁に関わる写真を収集し、それらの写真を手がかりに地域の歴史を描いてきた。一枚一枚の写真から今帰仁の様々の歴史の場面をみることができる。これまでに報告した

「写真にみる今帰仁」のタイトルの一部は次の通りである。

- ・今帰仁村のある風景
- ・仲尾次のハサギと公民館
- ・今帰仁（北山）城跡の正門付近
- ・運天港と運天のムラウチ集落
- ・大正・昭和（戦前）の謝名の湧川家
- ・仲原馬場（ナカバルババ）と松並木
- ・平敷公民館の棟上げ式（昭和30年代）
- ・謝名・平敷のサーターヤー（製糖工場）
- ・一軍人の仲原馬場での村葬と墓
- ・渡喜仁から上運天にかけての風景
- ・変貌していく古宇利島
- ・古宇利島の港付近
- ・今泊の道ジュネー
- ・仲宗根（ブンジャー）のマチ
- ・王城での嶽の御願（タキヌウガン）
- ・渡喜仁の伊是名家（明治44年頃）
- ・勢理客の公民館建設と豊年祭
- ・仲宗根のアサギ付近
- ・今帰仁の風景・人々・生活
- ・戦後、間もない頃の生活
- ・大井川と寒水（パーマ）村付近
- ・羽地内海、ムラ移動や塩づくりの歴史が
- ・琉球の歴史を秘めた運天海
- ・諸志の志慶真砂糖屋（シジマサーターヤー）
- ・ありし日の今帰仁の風景
- ・ムラの歴史を彷彿させるコバティシ
- ・ヤガンナ島とマリーの塩田
- ・大井川溪谷を通る道
- ・シマの芽茸き家・子供達・水くみ
- ・かつて賑いをみせた湧川のマチ
- ・阿応理屋恵按司ノロと今帰仁ノロの遺品
- ・平敷の掟田平での「献穀田御田植式」
- ・明治34年頃の今帰仁校と兼次校
- ・明治24年頃の天底校と古宇利校
- ・与那嶺の旧公民館
- ・昭和12年頃の仲尾次の人々
- ・運天港付近の古い墓（昭和10年頃）
- ・今泊のハサギンクラー
- ・運天のトンネル
- ・兼次校の学校林と開墾

- ・今泊（ムラ・シマ）の人々
- ・越地のウヘーでの式典（昭和17年）
- ・芽茸き校舎の「今帰仁中学校」
- ・今泊のアジマー（交差点）付近
- ・天底尋常高等小学校の実習農園（昭和9年）
- ・戦前・戦後をつなぐシマの人々
- ・諸志の志慶真神ハサギ付近（昭和15年頃）
- ・戦争で壊滅、そして復興（天底校）
- ・北山高等学校の設立（昭和23年）

平成10年12月現在91回に渡って連載を続けてきた。150枚余り一枚一枚の写真を手がかりに、今帰仁のムラ・シマの様々な歴史の場面を読み込んできた。かすかな記憶の中に残っていた風景や出来事や社会の流れを、もう一度鮮明に浮き上がらせてくれること度々である。まさに、写真は歴史の一場面を写しだしている貴重な史料だといえることができる。できるだけ聞き取り調査を行い、写真の場面に登場してくる方や関わった方々に語って頂いた。そうすることで体験した方々の歴史が重なり、史料に奥行きが加わる。またその方々は、写真を通して歴史の場面に登場させることにもなる。

歴史文化センターでは、写真を写真家がみる視点だけではなく、写真を通してその時代やムラ・シマの様子をみ、そしてシマの方々から写真の場面について話を聞き記録していく。そのように写真を歴史史料として扱っている。

4. 「地域史づくり」の目的と方法

今帰仁村の歴史文化センターという名称の博物館であるが、その展示は前述べたように、調査・研究（地域史づくり）の成果を踏まえたものである。常設展の柱となるのは「今帰仁の歴史」と「今帰仁のシマ・ムラ」、そして「生活と文化」という大きく三つのテーマで構成されている。「歴史」部門では発掘された今帰仁城跡の遺物や今帰仁に関わる歴史史料が展示してある。

柱の一つである「今帰仁のムラ・シマ」では、今帰仁の19のムラ・シマを様々な視点で描くが、調査・研究なくして以上の展示にふくらみを持たせていく事はむずかしいと考えている。

それでこの項では、現在今帰仁村歴史文化センターの活動の中心である「地域史づくり」の方法と目的について説明したい。

歴史文化センターが行う調査は過去・現在・未来を視野にいれ、19のムラ・シマを様々なテーマで描くことを基本としている。例えばこれまで、村の歴史や人口、生業・地名・小字・屋号・集落形態・祭祀・自然・生活道具・集落移動などの項目をあげて、19のムラ・シマごとに調査し記録していく作業を進めてきた。中にはまだ継続調査中のものもあるが、ムラ・シマごとの調査が基本であり、そこから見えてくるものが今帰仁のムラであり、今帰仁の歴史・文化なのだという考え方がベースにある。

また、各項目（テーマ）ごとに各ムラ・シマの現況調査を主に行ってきたが、その調査においては平成元年、あるいは平成3年、5年、10年の調査という時間的な概念を明確にしている。それは10年後あるいは30年後に同じ項目で調査をし、比較できる史料づくりをしていくためである。つまり、将来使える史料づくり、別の言葉でいえば過去・現在・未来という時間を見据えたものさしづくりをしていることになる。

将来使える史料と言ったが、もし近世あるいは明治の初期に百年後に使える、使われるという視点で記録がなされていたら、私たちの研究や「地域史づくり」は、もっと豊かな実態を踏まえたものになっていたであろう。そのことを考えた時私たちは今何をなすべきか、はっきりしてくる。それは現在を記録し、次の次の世代に贈り物として生に近い史料を届ける、ということである。様々な項目のムラ・シマごとの調査はこのような視点でなされており、今のペースで今後十年間調査記録を続けた時、比較研究できるものさしがどれだけ厚みを持つてくるか楽しみである。

私たち今帰仁村歴史文化センターの視点は、自分たちを百年あるいは二百年先に置き、現在を振り返って見る。ムラ・シマを描くために必要とする史料は、百年後の人達にとっても欲しいと思う史料だろうし、そこに向かって調査記

録をつくっていく。その記録の積み重ねがあることで、実態を踏まえた議論ができるであろう。そのような視点にたった史料づくりをすることが、今帰仁村歴史文化センターの業務の柱である。

5. 歴史の主人公はムラ・シマの人々

ムラ・シマをまとめた単位で調査し記録づくりをしていると、ムラ・シマの方々がまさにそのムラ・シマの歴史の主人公であり、その方々抜きに記録することはできないことがわかってくる。

ムラ・シマを描くには歴史はもちろんのこと、生業・人々・祭祀・地名・屋号・生活道具・自然など様々なテーマが切り口となる。様々なテーマを掲げることは、ムラ・シマに住んでいる方々にそのテーマを通して、出番をつくることである。言葉を換えて言うと、そのテーマを通して登場するムラ・シマの人々こそ、歴史の主人公なのだということである。ある人は生業（農業や漁業などの職業）で、神人は祭祀で、青年たちはエイサーや豊年祭などで歴史の場面に登場させることができる。これまでの歴史は、ピラミッドの頂点、つまり支配者の歴史だと言われてきた。今帰仁城を中心とした歴史もまた支配者の歴史である。が、現在ムラに住む方々が多くのテーマを通してその歴史を語り、人々の記録が積み重なった時、ピラミッドの頂点の歴史だけが歴史なのでなく、ムラを支える自分たち一人ひとりが歴史の主人公であることに気づく。

歴史文化センターの目的は、歴史を解明していくことや祭祀の本質は何かと問うていくことはもちろんであるが、そのことを目的にしているものではない。私たちの考え方は歴史の解明や祭祀や地名の語義が何かということよりも今帰仁のムラ・シマが何なのかを問うと同時に、ムラ・シマに住んでいる人達が、なぜ自分がそこに存在しているのかを問うための学問でありたい。だから、歴史だけでなく民俗やさまざまな学問を駆使してムラ・シマを描こうとしている。

今帰仁の歴史文化センターのこれまでの調査や研究活動、そしてこれから始まる展示は以上述べたことを基本としている。歴史や民俗や生業を手がかりにして、今帰仁のムラ・シマが何であるのかを問うていく。それは、そのムラ・シマに住んでいる自分たち一人ひとりの存在が何であるのかを問うための学問でありたい。自分自身の存在を問うための歴史であり民俗であり自然であり、そういう学問でなければならないと考えている。

これまで様々な研究者がムラ・シマの方々から調査データを取り、その論文やレポートなどを送って下さるが、それは必ずしも研究の成果を地域に返したことはなっていないように思う。と言うのは、資料を提供した方々を抜きに議論されている場合が多いのである。それも学問の一つの方法だろうとは思いますが、今帰仁では資料を提供していただいた方々が読み手であるという関係をつくってきた。

調査記録をまとめていく場合、祭祀を行っている神人であったり、生活道具や稲作について語って下さった方々に向かって書いている。ムラ・シマに住む方々に向かって編集作業をするなら、地域史(字誌や村史)をつくる際にあえて市民のための、あるいはムラの人のためのといった言葉は必要としなくなる。

ムラ・シマの人々を歴史に登場させていく作業は、将来支配者の史料によって歴史が議論されるのではなく、ムラ・シマに住んでいた人々一人ひとりが登場してくる歴史議論を準備するものである。歴史文化センターがこれまで行ってきた調査研究を形にし、その作業を10年、20年と続けていく。それは今帰仁村歴史文化センターの業務の柱であるが、その結果、今帰仁の歴史はムラ・シマに存在していた人々の顔がよく見えてくるような歴史が描かれるであろう。

ムラ・シマに住む人々を主人公として記録する事は、前に述べたように、100年あるいは200年先の将来への贈り物として届ける作業だと考えている。100年、あるいは200年後の皆さんは昭和という時代、あるいは平成という時代を生きた資料で議論していただきたい。学説や論では

なくてである。もし、近世の人や明治期の人たちが100年後、あるいは200年将来に向かって記録づくりをしていていたら、私たちの研究は今とは異なった方向に進んでいたのではないか。そういうことを考えると、今わたしたち今帰仁村歴史文化センターが目指すべき方向が見えてくる。

祭祀の古い形や土地利用やムラ・シマの形態などを調査し記録していくことも大事である。しかし、もっと意識して記録していかなければならないのは現在だと思う。現在、地域に住み生活している方々に語っていただく、そうすることでその記録は生きてくる。その記録は将来使える、使われる史料である記録の仕方、何が変らず、何が変ったのかがわかる資料、そういう資料づくりを目指し、そして目的にしている。

6. 今帰仁村の「地域史づくり」の成果

これまで述べたことは、調査・研究の成果から生み出された考え方であり方法である。このような考え方は、ムラ・シマの方々との関わりで得たものである。今帰仁村における「地域史づくり」の成果として今までの主な成果をあげると、まず『なきじん研究』がある。平成元年から8冊が発行されている。「今帰仁のムラ・シマ」「すくみち」「今帰仁の歴史」「今帰仁の歴史と文化」「今帰仁の地名」として発行した。

これまで、14回の企画展と4回の特別展を開催してきた。ここで平成4年度に行った企画展「今帰仁の生活道具」について少し触れたい。たくさんの道具を収集し、多くの方からその道具にまつわる話をうかがってから、「民具」という言葉が使えなくなりました。民具というと、もう使われなくなり、過去のもので博物館に眠っている印象が強い。しかし、その道具はかつて最も多く(数も利用度も)使われ、人々の生活と切り離す事のできない、歴史の中で圧倒的な幅を占めてきた「特別な」道具たちである。またそれらの道具を使ってこられたシマの皆さんがまだまだお元気で、その思い出を大切に生きていらっしやるのを見ると、どうし

ても民具という呼び方ができないでいる。そのため生活道具という言葉で表現しているのであるが、生活道具そのものの展示というよりは、その道具を通して道具を提供して下さったムラ・シマの方々に登場させることをねらいとした。

三ヶ月ばかりでシマ中から1000点あまりの道具の提供があった。お宅に何々と稲作の道具が10点ばかり置かれている。それらの道具は、その方がかつて稲作をしていた証なのである。かつて馬を持っていた方は馬車や鞍や鋤など馬に関する道具を提供して下さる。提供された道具を通してその人の過ごしてきた生活が、その人の顔が見えてくる。と同時に、水田の多い地域、海の道具の多い地域など、その地域性を知ることができる。そして展示された道具を見て、その時代を体験した方々はそれぞれに自分の生きてきた日々を重ねて見ていく。つまり「資料提供者が見学者」なのである。

「すくみち」という機関誌を発行しているが、資料を提供して下さった方々が読み手であるという関係をつくってきた。ある意味では、「すくみち」はムラ・シマの方々に向かって出してきた記録だと言える。

おわりに

ムラ・シマの方々の調査記録を報告すること度々であるが、明治、あるいは大正生れの先輩方の記録をまとめていると、沖縄の歴史の中で16世紀の尚真王の文化の華やいた時代、近世の尚敬王の時代、言ってみれば二つの黄金時代が浮かびあがってくる。その二つの時期が歴史上の黄金時代というならば、現在という時代はどのように呼べばいいのか。現在は過去の沖縄の歴史との比較でいうならば「とてつもない時

代」とでも呼んだらいいのだろうか。

明治・大正、あるいは戦前生まれの方々は、裸足の時代から悲惨な戦争を体験し、そして戦後の復興期、昭和30年代からの高度経済の成長時代、さらにテレビ、宇宙へ人間が飛んでいく時代を体験した方々である。そのような振り幅の大きい体験をされた方々は、かつての沖縄の歴史上なかったことである。そのような時代に生きた方々の体験は様々な形で記録されなければならないと考えている。

裸足の時代から宇宙の時代を体験された方々が存在する時代は、これから将来ないかもしれない。「今帰仁における地域史づくり」は、現在の記録づくりを基本にしながら、将来過去の記録と比較検討できる記録づくりをしていく。それと同時に、史料を提供して下さるムラ・シマの一人ひとりが、その地に人間として存在していた証としての記録づくりをしていく。ムラ・シマに80年、あるいは90年生きた、一人ひとりの体験の記録の束がムラ・シマの歴史の柱となり、そこから見えてくるものが今帰仁のムラ・シマの歴史文化である。支配者の歴史をつづっていくことも大切であるが、ムラ・シマを支えた一人ひとりの膨大な記録を「地域史づくり」と記録集が編集されることで、ピラミッドをひっくり返した、厚みのある一人ひとりの歴史を描くことにつながるであろう。

なお、本稿は「今帰仁における地域史研究」(『沖縄文化81』1995年3月)所収をベースに、全国歴史資料保存利用機関関連協議会(第24回)全国大会(平成10年11月12日)で報告した「沖縄県地域史協議会20年の歩みと地域史の活動」の後半部分を「沖縄県今帰仁村の地域史づくりの事例」としてまとめたものである。